

ソ連の対日プロパガンダの舞台裏～モスクワ放送における日本人構成員の変遷と役割～

2024年4月13日

報告者：田中則広

「モスクワ放送」の目的

1991年のソ連崩壊以前において、モスクワ放送はソ連を代表する国際放送として、対外宣伝活動の主要な役割を担った。また、世界最大規模の国際放送として、1929年の放送開始以降、拡大を続けた

モスクワ放送の使用言語は1969年の時点で64言語。1970年代を通じて大きな変化はなく、1979年時点においても64言語で放送を実施。1980年代後半には75言語によりヨーロッパ、アフリカ、中近東、アジア、アメリカに向けて、1日あたり約270時間の放送を実施

このうち、日本向け日本語放送については、1957年にツェホーネン日本語課長が「日本向けラジオ放送」（「10月革命国立国家記録保管所」発行の『ソビエトの外国向けラジオ放送の歴史に関する論文集』所載。原文は露文）という論文の中で、

- 1) ソ連政府の平和的、友好的な対日政策を広く日本国民に宣伝すること
 - 2) アメリカ帝国主義者の対日策略の実態を日本国民に解き明かすこと
- という目的を持って行われたことを記している

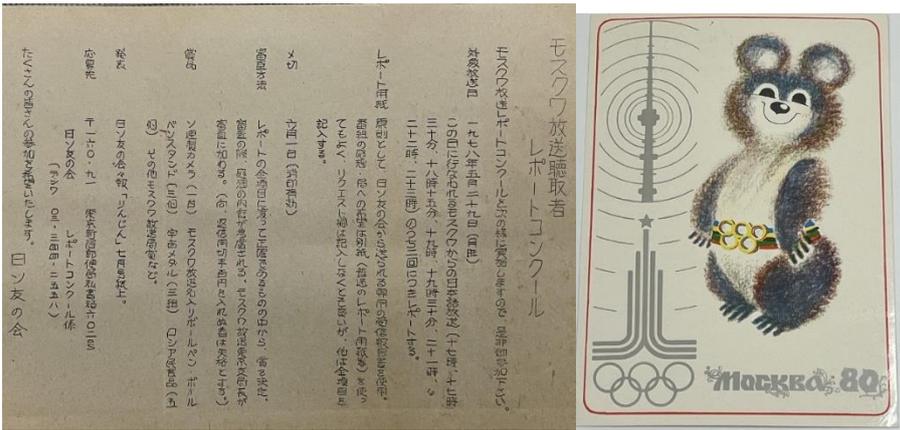
日本語放送の制作にあたっては、ソ連の人々の指揮の下で、多くの「日本人」（ソ連国籍保持者も含む）が参加。しかし、これらの日本人については不明な点も多い

そこで、第二次世界大戦中から「冷戦」終結までの期間の半世紀を中心に（1942年4月～1993年12月[「ロシアの声」に再編されるまで]を対象）、モスクワ放送の業務に従事した日本人の実態を明らかにすると同時に、これらの人々が対日宣伝放送で果たした役割を分析、検討した。「鉄のカーテン」越しの国際コミュニケーションという視点から、日本とロシアの歴史的関係を考えるための一助になれば幸いである

日本語の番組はモスクワの本部と、ハバロフスク支局の双方で制作されていたが、ハバロフスクはモスクワの指揮の下に業務が行われてきたため、今回はモスクワの日本人スタッフに絞った（ただし、ハバロフスク支局経由でモスクワ本部に来た日本人も多い。また、ハバロフスク支局の日本人の活動についても、重要な研究テーマであると考えている）

日本語放送の番組表やベリカードなど（1970年代後半から80年代前半）

モスクワ日本語放送時間表								
時間	17.00—17.30	17.30—18.15	18.15—19.00	19.00—19.30	19.30—20.00	21.00—21.30	22.00—22.30	23.00—23.30
日曜日	ニュース ソ連の平日 ルポなど	ニュース 文芸放送	ソビエト だより 音楽番組	ソビエト だより お返事の時間	ニュース 「聴取者の 手紙から」	今週のソ連邦	今週のソ連邦	ニュース 「聴取者の 手紙から」
月曜日	ニュース ソ連の平日 ルポなど	ニュース 科学と技術	ソビエト だより 時事解説 音楽番組	サハリ ン放送局の プログラム	ニュース 友好と善隣	ニュース 青年放送 「灯台」	ニュース 友好と善隣	ニュース 青年放送 「灯台」
火曜日	ニュース ソ連の平日 ルポなど	ニュース 時事解説 現代ソビエト音楽	ソビエト だより 科学と技術	ソビエト だより 時事解説	ニュース ソビエト文化	ニュース、 ラジオジャーナル「今日の話題」	ニュース ソビエト文化	ニュース、 ラジオジャーナル「今日の話題」
水曜日	ニュース シベリア・ 極東案内	ニュース 時事解説 クラシック音楽の コンサート	ソビエト だより シベリア・ 極東案内	ソビエト だより 時事解説	ニュース ソビエトの パノラマ		ニュース スポーツの時間	
木曜日	ニュース お返事の 時間	ニュース ロシア民族音楽	ソビエト だより お返事の時間	ハバロフスク 放送局の プログラム	ニュース ソビエトの パノラマ		ニュース	
金曜日	ニュース ソ連の平日 ルポなど	ニュース 時事解説 ソ連諸民族の メロディー	ソビエト だより 時事解説	ソビエト だより 時事解説	ニュース 科学と技術		ニュース 科学と技術	
土曜日	ニュース ソ連の平日 ルポなど	ニュース ソ連の平日 ラジオ懇談会	ソビエト だより ラジオ懇談会 音楽番組	ウラジオ ストック 放送局の プログラム	ニュース ソビエトの パノラマ		リクエスト音楽	



1970年代から1980年代にかけて、日本ではBCL (Broadcast Listening) がブームに。日本国内において受信状況が良好な海外の日本語放送のひとつがモスクワ放送であった

番組には、ソ連全般について紹介する『ソビエトだより』や『ソビエト文化』、音楽番組の『現代ソビエト音楽』や『ソ連諸民族のメロディー』、聴取者と放送局をつなぐ『聴取者の手紙から』や『お返事の時間』などがあった。また、モスクワ制作の番組のほか、サハリン、ハバロフスク、ウラジオストックの各放送局で制作された番組を放送するなど、地理的に日本に近い沿海州の情報を聴取者に伝えていた。デタントが進んだ1970年代であったが、冷戦下であることに変わりはなく、番組の多くはソ連のプロパガンダの側面が色濃く反映されており、全体としては堅い内容の番組が多かった。ただし、ソ連情報の入手が困難な時代にあって、モスクワ放送を継続的に聴取することは、ソ連の状況を知る上で必要不可欠であり、この放送はまさにソ連情報を得るための貴重な情報源であった。

「モスクワ放送」の日本人

【「モスクワ放送」の日本人の時期区分】

	時期	新たに加わった「グループ」	氏名（五十音順）
第1期	日本語放送開始（1942年）～	「戦前」組（亡命者、活動家など）	岡田嘉子、片山やす、野坂龍、ムヘンシャン（緒方重臣）
第2期	1950年代前半	元抑留者	石井次郎、岡田敬介、川越史郎、清田彰、滝口新太郎、袴田陸奥男
第3期	1950年代中盤	日本共産党関係者	河崎保、清水美智子、山ロー正（夫妻）
第4期	1973年～1993年	フリーの「若者」	西野肇、日向寺康雄 他多数

ただし、第1期の野坂龍は日本共産党員であるものの、第3期の「日本共産党関係者」には入れていない。上記の他、主な日本人構成員として、東一夫（清水長一）、加藤たつ子などがいる。上記の表に当てはめるのが難しいケースもある

第1期

日本の敗戦以前にソ連に居住していた社会運動家やその家族、亡命者

限られた人材の中で、初期の日本語放送を支えた。ただし、ソ連人の指示に従い、業務を遂行しているに過ぎなかったともいえる

第2期

捕虜としてソ連に抑留される中で、ソ連の体制に共感を覚え、日本の「民主化」に尽くそうとソ連に残った元日本兵。ソ連当局に「一本釣り」された若くて優秀な人材が多く、ハバロフスクで対日放送業務に携わった後、1950年代に入ってモスクワに移り、アナウンスや翻訳業務に従事した

「冷戦期」の全期間を通じて、業務の中核を担った。ソ連側にとって重要であるとされる、ニュースや解説などを担当

第3期

自由日本放送のアナウンサーを経て、モスクワ放送に転じた河崎夫妻（河崎保、清水美智子）など、日本共産党の関係者

日本語課における「ささやかな」改革

「ラジオ本来の機能を活かすべき」河崎、滝口、清田

→第6回平和友好祭（1957年）における取材スタイルの変化

参考までに、歴代日本語課長は、ツェホーネン、アレクサンドロフ、レービン

1960年代に入ると…

中ソ対立、日本共産党の「親中反ソ」傾向の高まり

1964年には、モスクワ放送においても、頻繁に日本共産党を批判

→日本共産党関係者（河崎、山口）は、「日本の民主運動分裂に加担するような原稿は読めない」と申し入れ、日本共産党批判の原稿を読むことを拒否。滝口アナウンサーが代わりに読んだ

第4期：

1973年から10年間、ソフトな内容の番組で日本のリスナーから大人気（西野）
西野の帰国から4年後、日向寺がメンバーに。その後、次々に若い日本人が参画

資料にみる日本語放送の「検討会」

【事例1】（原文のまま）

（年は未記載）10月3日、露文をヤシエンコ氏におくる

放送時間と番組改訂についての意見

アナウンサー一同

1. ロシア語講座の放送時間について
2. 「ご返事の時間」について
3. アナウンサーの労働体制について
4. 「子供の番組」をいれた方がいい
5. 音楽番組をストックした方がいい
6. アレクサンドロフさんの協力をえることについて
7. ソ連の科学と技術の時間が1回5.30の番組に

なっていますが、この時間は、日本人達は
ちょうど帰宅の時間で聞く人が少ないと思います。
アカハタ等でもとりあげられている回数が多く、
わりに評判のよい番組ですのでおそい時間の方がよい。

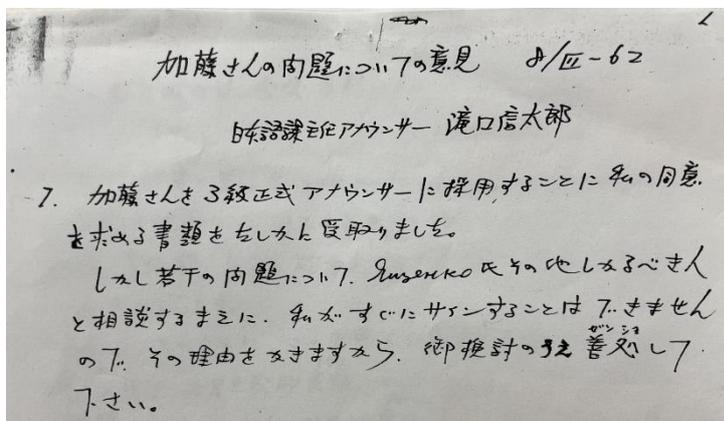
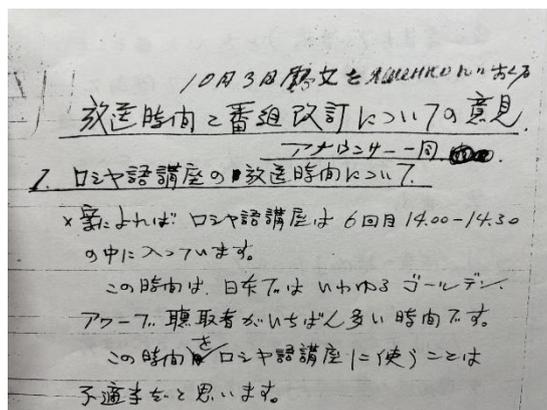
【事例2】（原文のまま）

加藤さんの問題についての意見 8/Ⅲ-62

日本語課主任アナウンサー 滝口信太郎

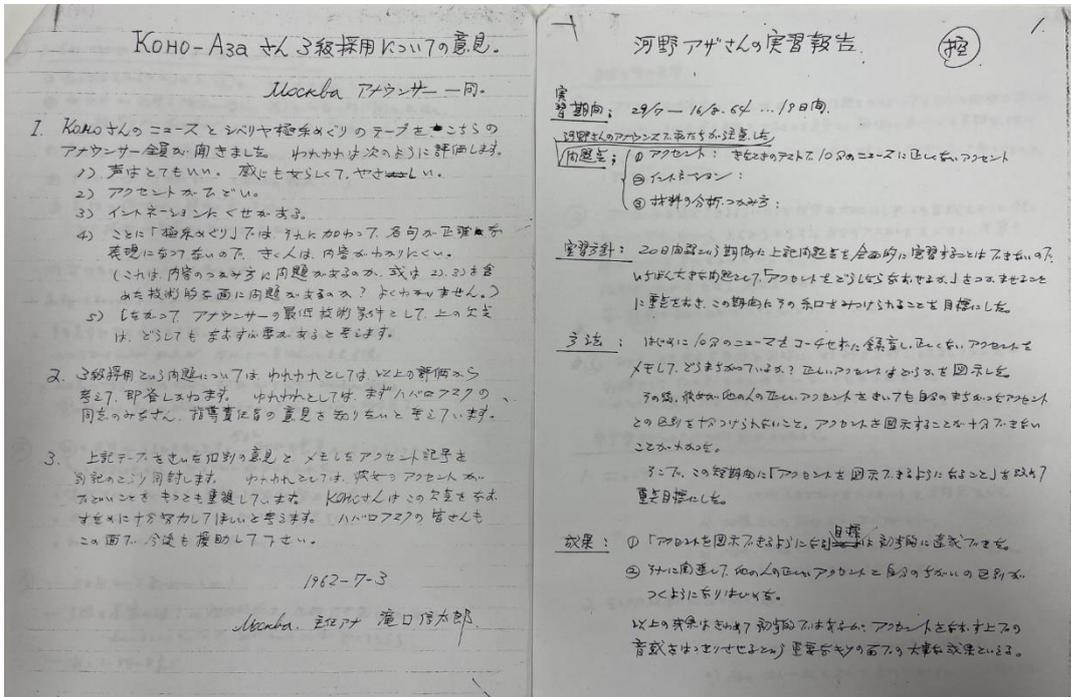
加藤さんを3級アナウンサーに採用するにあたり、

- ① 加藤さんはその資格があるか
- ② 日本語課は彼女を受け入れる条件があるか



【事例3】(原文のまま)

河野アザさん 3級採用についての意見、および、河野アザさんの実習報告



「河野アザさん 3級採用についての意見」より抜粋

モスクワ放送日本語課のアナウンサー全員が、ハバロフスク支局の河野アザさんの『ニュース』と『シベリア極東めぐり』のテープを聴取。「モスクワのアナウンサー一同」として、以下の通り評価した

- 1) 声はとてもいい。感じも女らしくて、やさしい。
- 2) アクセントがひどい。
- 3) イントネーションにくせがある。
- 4) ことに「極東めぐり」では、それに加わって、各句が正確な表現になっていないので、きく人は、内容がわかりにくい。

(これは、内容のつかみ方に問題があるのか、或は2)、3)を含めた技術的な面に問題があるのか?よくわかりません。)

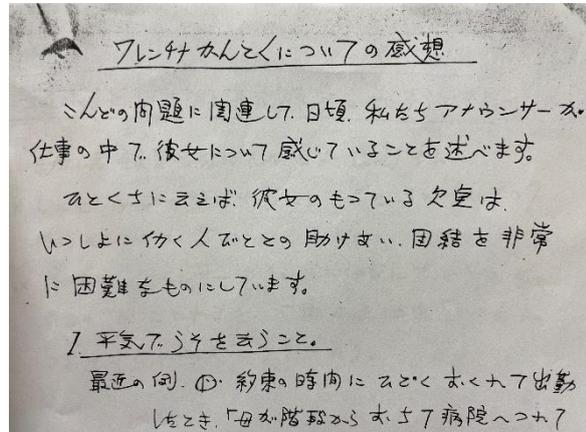
5) したがって、アナウンサーの最低技術条件として、上の欠点は、どうしてもなおす必要があると考えます。

【事例4】(原文のまま。□は解読できず)

ワレンチナかんтокについての感想

アナウンサーらによる、ワレンチナ監督
批判

1. 平気ですを云うこと
2. 仕事の計画性がなく、他人の仕事の条件を考えようともせず、自分勝手にやろうとする
3. こうした彼女の欠点を改めてもらいたいと思って意見を出したら、絶対うけられないだけでなく、いつも仕事にえいきょうするほど大さわぎになる
4. 仕事を向上させるための正しい指導性と□い協力□に欠けている



おわりに

日本語放送の日本人が担った役割は、アナウンスや翻訳に限定

限定された範囲内で、より良い放送を制作するための中心になったのは元抑留者のメンバーであったといえる

清田、滝口の両者は1950年代前半から従事し、滝口は1971年に亡くなるまでの約20年間、清田については1989年に引退するまでの約40年間にわたり、あくまでも共産主義肯定の立場から、放送現場において中心的役割を担った

日本共産党関係者は1950年代中盤から1960年代前半にかけて、元抑留者のメンバーとともに、中心になって番組を支えた。しかし、日本共産党とソ連共産党の対立の激化によってモスクワを去ることになる。ソ連当局は、重要度が高い番組などは元抑留者のメンバーに任せる一方、ソ連の事情に通じているため、第4期の西野とは異なり、自由な発言は認められなかった

【主要参考文献（日本語）】

- 青島顕『MOCT 「ソ連」を伝えたモスクワ放送の日本人』集英社、2023年。
- 加藤哲郎『モスクワで肅清された日本人：30年代共産党と国崎定洞・山本懸蔵の悲劇』青木書店、1994年。
- 川越史郎『ロシア国籍日本人の記録：シベリア抑留からソ連邦崩壊まで』中央公論新社、1994年。
- 木村慶一『モスクワ・日本・ハバロフスク：対日モスクワ放送員の手記』川崎書店、1949年。
- 島田顕「ムヘンシャン：モスクワ放送最初の日本人アナウンサーの軌跡」『アジア太平洋討究』14号、2010年3月、121-35頁。
- 「第二次世界大戦中のモスクワ放送：モスクワからの日本語放送はいかにして開始されたのか」『アジア太平洋討究』27号、2016年10月、125-34頁。
- 「開始当初のモスクワ放送日本語番組：放送内容と批判」『アジア太平洋討究』28号、2017年3月、211-24頁。
- 「キム・ギウン：知られざる戦時中のモスクワ放送日本語番組の朝鮮人スタッフ」『アジア太平洋討究』29号、2017年10月、71-83頁。
- 「石坂幸子とモスクワ放送：元NHK女子アナウンサーが見た戦後直後のハバロフスク放送局日本語放送」『アジア太平洋討究』33号、2018年3月、91-107頁。
- 「1950年のモスクワ放送日本語番組：冷戦期の日本語放送に対する評価と改革提言」『アジア太平洋討究』43号、2022年2月、85-101頁。
- 西野肇『冒険のモスクワ放送 ソ連“鉄のカーテン”内側の青春秘話』学研プラス、2022年。
- 山本武利『占領期メディア分析』法政大学出版局、1996年。